

ある図書館人の精神史

坂口 雅樹*

「バビロンに衝かれた人」

車窓から遠くをぼんやり眺めていると、西の空に暮れゆく雲の帯に、ときおり思い出すことがある。高円寺を過ぎたあたり、とりわけ阿佐ヶ谷では、時間が止まったような、いつしか覚えた心の疼きを感じる。それは青い感覚である。ある書物の名が、三十年前に逆流する時の重みを感じさせる、といえよいのだろうか。「バビロンの流れのほとりにて」森有正。人が素直になれる瞬間を、見事に指し示していた。一つのセンテンスが絵筆のように振る舞い、群青に光を浴びて思索の海を現出する。私信であるにもかかわらず、見知らぬ人にまで語りかけるこの書簡、それは一種の妙薬である。

南阿佐ヶ谷の安アパートの一室で、住人がそれとなく差し出した精神の形が、このバビロンであると、今でも思っている。その内省的な書物との出会いを、青年であったからこそ感動した出会いを、今また告白したい衝動に駆られる。青臭い思い出話をたった一人に話しかけるのも可笑しい話であるが、つい先ほど地上に姿を現した、真新しい図書館で日々を営んでいるから、恥じらいもなく言葉が欲しいのかも知れない。ここはその奥深い地下三階。窓ガラスの外に、空堀りの壁が垂直に帯をなして淡い黄緑色のタイルを浮かび上がらせている。その堀りに沿って湾曲した内壁面の列柱を眺めていると、窓際から平面的に広がる重厚な机が、僕にある意味を投げかけてくる。そして重く沈んだ茶褐色に広がりなす閲覧席を見渡

*さかぐち・まさき／総合サービス課

すと、造形美に飢えた者に思考を促す、何か特別な力があるような気がする。ことに開館間際のピアノソナタ。「憂愁のノクターン」フジ子・ヘミングの奏でる鍵盤が、朝の短いひと時に、限りない慰めに満ちた情景を演出する。時にはコンチェルトも流れるが、ソナタがとりわけ心に染み入るのは、地下深い閲覧席の張りつめた空気を一人だけの世界に変容させるからであろう。ラ・カンパネラを聴いて、形容のしようもないほど内に向かい、そして友人が三十年前に差し出してくれた書物を今再び読むのは、こよりほかにはない。

初秋の冴え渡る空に、日本海の白波のはるか彼方から、ぼっと汽笛が鳴り響く。白い客船が光を受けて港に入ってくる。この情景が蘇るのは、書物から目が離れた、一瞬間の間である。誰もまだ入って来ない、無人の閲覧席を眺めている早朝に、それは起きる。そして故郷が脳裏をかすめる折に、小佐渡の山際に向かって、はるか天空のすじ雲が、この一幅の風景画に彩りを添える。感情が千路に碎け散って、止めどなく淋しさが流れてゆくのを覚える。あれは十歳をちょっと越えたころであつた。島の海岸から、半キロメートルほど離れた、海に向かって馬蹄形に突き出た小高い丘の畑で、じっと見つめていた情景があつた。それは、僕の旅立ちの記憶であつたと、今にして思う。父もきっと見ていたに違いない。ただこの小高い段段畑の土ではなく、砂利石を踏みしめた浜辺に立って、風景はいつまでも、誰が見ても同じ風景としてあつたのだ。しかし父は旅立てなかった。三十代の半ばで逝ってしまった。親の顔を記憶に残せない、まだ一歳の乳飲み子を背負って、病身の体でここに立っていたという。

母は言った。「死ぬ間際まで、おまえを背負って、ずっと海を見ていたよ。」それは、もの心ついた頃から、父の思い出話の中に出てくる最後の言葉であつた。島に生まれ、島から一步も踏み出すことなくこの世を去った人が父であつたことが、僕の運命と決定的なつながりをもっていたと思う。

「考えてみると、僕はもう三十年も前から旅に出ていたようだ。僕が十三の時、父が死んで東京の西郊にある墓地に葬られた。二月の曇った寒い日だった。墓石には『M家の墓』と刻んであって、その下にある石の室に骨壺を入れるようになっている。その頃はまだ現在のように木が茂ってい

なかった。僕は、一週間ほどして、もう一度一人でそこに行った。人影もなく、鳥の鳴く声もきこえてこなかった。僕は墓の土を見ながら、僕もいつかはかならずここに入るのだということを感じた。そしてその日まで、ここに入るために決定的にここにかえって来る日まで、ここから歩いて行こうと思った。＜バビロンの流れのほとりにて——パリにて、一九五三年十月八日＞」

ところで、思索の出発点が、墓標であるとは考えたくない。しかし墓との運命的な出会いが、思索を促す契機になると、僕は断言したい。思索とは、言葉を定義することであり、その言葉は自分の言葉でなければ意味がない。そしてもっとも原初的に発する言葉は、肉親を介してのみ成立するのではなからうか。僕には、墓石はない。あるのは、海から流れ着いたと思われる三つの石だけである。一つは祖父のもの。もう一つは父のもの。そして僕が十三歳のときに祖母の石が並んだ。理由は墓を建てる金がなかった、ただそれだけのことである。だが僕は、それだからこそ子どもの頃から、墓参りを躊躇した。平らな地面に石が並び、塔婆が倒れている。土饅頭などない。母に連れられなければならないところではないと思った。母が僕を背にして、なにやら口ごもりながら、雑草を取り除いている。その情景はいまでも不可解である。五人の子どもの行く末を案じた言葉であったと思いたい。でもそのことはもうどうでもよい。今でしか理解できない不幸。それを本当の不幸とは思わない。だがその墓地も、今では周囲と同じようなきれいな墓石に変わっている。僕の背丈以上のその大きな墓石の前に立つと、あれほど嫌っていた墓参りが変に恋しくなった。しかし、僕はここに入るためではなく、ここから出ていくために、ここに帰ってきたのだと思う。

「バビロン」を読み進むと、サン・ヴィターレの教会を築き上げた石工についての記述が目をつく。三週間のイタリア旅行を終えてパリに帰った森有正は、ラヴェンナのこの教会が思い出に残ったという。「僕は、この石を組み合わせた千五百年前の、名もない石工のことを考えた。かれはこの画を組み上げて、一瞬間それに見とれ、すぐ別の、多分もっと大事な仕事の方へ移っていったのだろう。ああ、この一瞬間の貴さ！我々が人間として生きているのは、五十年、七十年の労苦にみちた生活の中で、この一

瞬間のためではないのか。その瞬間の感動は忽ち淡くなり、薄れ、やがて消えてゆくだろう。労苦も、生活も、その人の名さえも、永劫の時の流れの暗黒の中に消えてゆくだろう。時には作品さえも。これははたして無意味か。無意味ではないか。そういう言葉の議論は、僕にはどうでもよいことだ。ただ僕は、この瞬間のこういう喜びが生活に力をあたえ、つかれに耐えさせることを知っているだけだ。しかしこの瞬間は、深く思索する人にとって、限りなく自分を延長してゆく動点になるだろう。〈——パリにて、同年十月三十一日〉

僕はラヴェンナに行ったことはない。行くべきであったのかもしれない。サン・ヴィターレの構内の、南仏マントンの海を思わせると森の記した、水盤に湛えられた浅緑の水が僕の青春であったと思う。そして、そのイメージが思いもよらない所で訪れた。森がラヴェンナを訪れてからおよそ三十年後、僕はラヴェンナの対岸に立った。アドリア海の遥か南東のその先、ドゥブロヴニクあるいはラグーザ。中世に源を発する水道の遺構が今も軽やかな流れを育んでいる城砦都市に、闇を衝いて降り立った。

そこは真夜中の新市街地のバス停。宿はもう門を閉じている。誰にも会うことはない。そして旧市街に向けて、城壁の傍らの坂をほとんど無意識に緩やかに降りていった。不安はなかった。ただ乾ききった暑さの中で緊張感だけはあった。この中世の城郭、周囲25キロで囲まれたその町の城門まで、それは続いた。僕は歩みを止めた。夜明けまでここに居よう。そこは城門のかたわらの、アドリア海を眼下に見下ろす石畳の広場に、ぽつんと置かれたベンチであった。海は目の前にあるがまだ見えない。でもかすかに潮騒を感じる。日の出をひたすら待った。

城門にさしかかると、きらきりと輝く石畳が続いていた。真夏の焼け付く太陽は、足下からさらに日の光を増して、上水道の水を照らしている。十五世紀からといっても、流れ出した水は、ただの水であるといえどもそれまでである。ただその象徴ともいべきオノフリオの二基の噴水は、一四三八年という時を刻み込んだ瞬間から、この町を美しく飾り立てた。イタリア人建築家オノフリオ・デ・ラ・カーヴァと彼の協力者が地元の職人を雇って造ったものである。それは水不足に喘ぐ地中海住民・ドゥブロヴニク市民の命の源泉であり、今もお変わらぬ水源であった。職人たちは建

築家の師匠から上水道施設を建設する技術を学び取ったという。そしてその技術は歴史の中で受け継がれていったのだ。しかし、その感慨は引き継がれることなく、忘れ去られた。台座の側面に彫像を刻み込んで、小さなオノフリオの噴水を愛でた職人たちの安らぎはもうどこにもない。一九九一年十二月六日、ユーゴスラビア連邦軍は陸、海、空からこの町に大規模な攻撃を加え、この文化財を自ら理不尽にも葬り去った。「その知られない作者は、この美しい作品の中に、自分の魂を刻み、自分の魂の辿った軌道を証して、それだけを残して、過去の黄昏の中に消え去った。今は誰もかれを知る人はいない。かれの喜びも、悲しみも、愛も、憎しみも、すべてはかれらと共に永遠に去ってしまった。そしてかれの魂のもっともよきものが、この作品という万人が共有することのできる普遍的な形の中に刻み残されて、後世を照らしている。〈——フィレンツェにて、同年十月二十日〉」

図書館を一つの作品に喩える者はいない。そこは鑑賞する場ではない。〈かれ〉は誰に訴えることもできないし、そこに自分の名前を求めることすらできないからである。しかし精神生活を育む空気を漂わせている。そして精神が果実となって落ちる時を、いつしか待ち望む人がいる。だから傑作を生む素地はある。森有正は、云う。「作品ということの本当の意味は、作者の名を消し去りうることに在るのではないだろうか。〈——同上〉」図書館は、だから名前のない作品であると思う。

自分の名を求める事のふがいなさ、あるいは不幸を誰が考えようか。それは、名も無い、地位も名誉もないただ黙々と自分の精神史を築いている図書館人に、ある種の諦めさえもたらす。図書館という組織ではなく、書物の列の中で、図書館人が精神の高揚を覚えるときに、それは訪れる。そのときに職業人を離れて、純粹に人としての感情の渦に巻き込まれる瞬間である。書物に囲まれている幸福感、それを僕は、日々の図書館生活で感じるのである。そして大切なのは、こういう僕の精神の一端に苦言を呈する、あの三十年前の「阿佐ヶ谷の住人」が、僕の心のどこかに棲みついていたことである。森有正を読んで、そんな内省的な文章に感動を覚えた者を、深く理解してくれたこと。もうここにはいないが、図書館の多くの若者たちに、図書館で糧を得ることのすばらしさを伝えた功績を、何

度でも繰り返して書き残したい衝動に駆られるのである。

「革命的ガイダンス」

朝に始まるリストの調べは心に染み入る。地底に広がるがらんとした閲覧席の隅々にまでその曲が鳴り渡る。空間に縦じまのカーテンが頭われて緩やかに、それでいて小気味よく波打つ。森有正は、言葉の定義を大事にした。そこには対象の定義に留まらず、内面を頭すための執拗なまでの探求があった。だから、心象風景を一つひとつ描いていく場所は、ここより他にない。それはまさにバビロンを読む時間と符合する。「冬の嵐の真夜中、城の一室で武士たちが火をたいて夜伽をしていると、一羽の小鳥が外の暗闇から部屋に飛び込み、一瞬の後、反対の側から再び闇の中に消え去った。王様が言った。『人生とはこういうものだ』と。静かに拡がっている光は、やがて徐々にすぼまり、急流のように外の暗闇の中に消え去って行くだろう。『在る』ということに対立できるものは何もない。あるとすれば、それは『なくなる』ということだけだ。何という恐怖すべき対立だろう。そして何という静けさだろう。<——パリ、一九五六年三月二十六日>」

静けさの本質は、一瞬の瞬きにあり、それは恐怖に近い。そして友情や愛情までもこの静けさ以外の何ものでもない、と森は言った。「静かな」ということと「静けさ」は違う。図書館の静かな部屋・ロダンルームに「静けさ」はない。だから密閉されたこの空間に僕は安住できない。人間の感性がそこにあって何かを、しかもそこが友情で満たされた「ときのしじま」に似た感情の渦の中で、誰かの思索を辿る。読書をするのはそういうときである。

書物は光を浴びて、という言い方が図書館には相応しく思える。ガラス張りの光に満ち溢れた閲覧席を眺めていると、そういう言葉が浮かんでくる。たしかに視覚の世界で終わればそれだけのことに違いない。「一昨日の手紙で、光芒あるいは光点というような言葉を使ったが、それは必ずしも適当な言葉ではない。それは余りにも視覚的すぎる。僕は、少し言葉はむつかしくなるが、純粹感覚、あるいは感覚の純粹状態という言葉を使

いたい。すべての本当の経験の、したがって思想の、出発点にはそれがある。僕はそれをどう説明してよいか判らない。ただそれが掘り下げられ、拡大され、分析されてゆく時、それは現実そのものと相覆うほど細密になるということだ。そしてこの感覚の純粹状態は、決して主観的なものでなく、それが感覚である程度だけ深く、厳密に対象との関連の上で出現するものである。それは光点であるだろう。一つの均衡感覚であるだろう。あるいは数箇の音の結合であるだろう。そのどれででもあるだろう。〈——同上〉

音楽を聞いても、文章を読みすすんでも、そこに情感がある限り、どこまでも主観的である。だから主観的なものから出発する他はない。革命的ガイダンスとして章を区切ったのも、実は主観的なものを掘り返す持続性の中に、個人を対象に近づける本質的なものが隠されていると思うからであり、図書館はその場を提供するガイダンスそのものだからである。しかしながらガイダンスは一過性のものではない。学生の短い期間だけでは革命は訪れない。何十年も、いや何百年も図書館が命を持っていると意識した者たちだけが、ガイダンスの精神を理解するのである。

「無記名の形の世界、それは音響、色彩、言葉など、他のカテゴリーの世界へ類推的に拡大してゆく。これは、そこから名が消えてゆく世界である。どんなに優れたものでも、そこでは、本質的に名がない。それは、もっとも深い意味において、空間性を定義するものである。僕は、この手紙の前の方で、一つの経験は、自我を定義する、と言ったことを記憶しているが、それはその日の手紙の中で述べたように、時間性を定義するものであった。〈——同年八月二十九日、オランジュにて〉」

歴史的に重要な町、観光地として好まれる色彩のある町、とかそういう街角ではなく、町の名前と全く関係のない、「僕自身と向き合った空間」に興味と集中が沸き起こる。パリという名前に捕われることなく、時間の流れの中で変化を遂げた感覚が、その名を消し去り、概念と定義に置き換わるとき、無限のヴァリエーションが顕われ出る。それが「面白い」と称するものではなからうか。そしてその感覚を養う世界が、言葉をちりばめた文字の世界であり、「誰か」の著わしたものではなく、紐解いていくうちに見つけ出した無記名の文章が、読書の宝なのである。書庫をせわしく

行き交う姿よりも、ゆったりと歩をすすめていく。向こう岸がもやに包まれ、あるいは朝日を浴びて海面からゆっくりと霧が立ち上がる光景を、無意識の感覚に秘めて、ぼんやりと書架に移ろう。そういう時間の感覚を、職人はもうとっくに忘れてしまった。だから失敗もなければ反省もない。したがって発見もない。時間に追われて、自己と向き合う空間はもうどこかへ逝ってしまった。

森有正は、僧院の静けさを愛すると記している。「それは人間存在が強く精神の方向へだけ開かれている形態である。建物は精神の一種の象徴にすぎない。<——一九五六年九月二日、ソミエールにて>」無数の民の集う建築物には、精神が宿ってしかるべきである、と僕は考える。その精神を感じ取る感性を養うものは、読書をおいて他にない。そしてそれは静けさの中にある。しかもそれは文字を眼に刻むことではなく、過去への飛躍を促す。森有正がバビロンの冒頭で幼年時代を回顧して、「一つの生涯というものは…」と書き出したのは、思考の連鎖が時間を追って過去に遡っていく運命にあるという証である。それは何も個人に限ったことではなくて、文明ですら背負っている。光、色、音、形、それに影。「美しいもの、美しいことは、その人にとって、いつもはじめに来る、ということだった。その美に到ろうとする時、我々の中には分解と融合とがはじまる。そしてその中に、自分の進むべき道が先取された軌跡のように、漠然と現れてくる。そして確かなことは、もうそれは、我々にとって、美ではありえない、ということである。リールケがあんなに幼年時代の追憶へ遡って行ったのも、幾分判るような気がする。<——同年九月三日、ソミエールにて>」

思想家は文字によって概念を定義する。しかし頭で考えただけでは定義は下せない。読書の限界ともいえる。暗示が必要である。雨、風、嵐、土、波、そして貧困。凡そ人生経験そのものが、自分の中で、固有の表現として結実する。ただそれは新しい発見などと言うものではなく、新しい表現というべきものであろう。図書館の中にだけ居たのではいけない。新しい風に吹かれてまた舞い戻ってくる。その繰り返しの中で自分の求めているものが顕かになるのではなからうか。

「僕の旅はまだまだ終わらない。むしろ始まったばかりだ。しかしこの短い期間においても、僕は実に色々のことを教えられた。また旅は思いが

けない喜びを数々あたえてくれた。優れた人、善良な人に出会ったこと、美しいものに打たれたこと。僕たちは計画的によいものを実現することが困難のように、それに出会うことも困難である。それらは思いがけない時にやって来る。〈——同上〉」そういうことは何も旅とはかぎらない。書物との出会いでも無限の可能性を秘めている。森はストラズプールのサン・トーマ教会図書室にて、マニュスクリの山の中からカルヴァンの16世紀初版本を発見して感動した。その感動の大きさは経験に比例する。しかもすべての感動の原点は最初の出会いに凝縮される。また感動を呼び起こす感覚は、自分にはないものとの出会いである。

「バビロンの流れのほとりにて」は、一九五七年一月に大日本雄弁会講談社からミリオンブックス叢書の一冊として出版されたものである。その後一九六八年六月には筑摩書房が再版した。また森有正全集第一巻、一九七八年六月筑摩書房刊でも読むことができる。僕が阿佐ヶ谷で見たのは、一九六八年版であった。読みやすさから言えば、この二段組みではなくて全集の第一巻であろう。青年特有の生真面目さが何物にもまして輝いていた頃は、二段組でも耐えられた。今はどうであろう。ゆったりとした活字を楽しむ時間がいい。それから活字を離れて、何かに取り憑かれる。想うだけではなくてむしろ見る、聴く、読む、書く、という積極的な行動の中で果物が熟していくように個性が育まれていく。しかも青年の時に経験した、耐えること、自分と戦うことだけは失いたくない。人間の尊厳が、この耐えるということによって確立できるならば、いつまでも青年でありつづけたい。